

「我等の一団と彼」における「他者」の考察

Research of "Others" in 《Wareira no Ichidan to Kare》 (We the Group and Him)

張 濟 人

TSOU Saijin

キーワード：他者 自意識 焦点

はじめに

「我等の一団と彼」は明治四三年五月から六月にかけて執筆された、石川啄木の最後の小説作品である。

小説の中で、「我等の一団」とは、「私」（亀山）、剣持、安井らのT新聞社の社会記者連中を指していた。「我等の一団」は、「学問党」と自称し、新聞社の現状を冷評し、改革を図ろうとする。しかし、このような議論は、あくまで「我等の一団」の内輪に限られていた。つまり、「我等の一団」は相対する勢力との交流がなく、ただ同じ意見を持っていた連中の間で連帯意識を強めていた。

一方の「彼」は、T新聞社の同僚の高橋彦太郎を指している。高橋は「我等の一団」より年長で、三一、二の年齢で、「人が何か言ふと、

結末になつて、ひよいと口を入れて、それを転覆かえして了ふやうな、反対な批評をする傾向があつた」人物である。高橋は「我等の一団」の議論に参加し、しばしば異論を出した。また彼は、ある時は社会現象について、またある時はこの社会にいる自分自身のことについても批判した。彼の観点は、「私」の注意を惹き、様々の対談をした結果、「私」に深い印象を与えていた。

本作は生前未発表であるが、啄木小説の中では比較的の高い評価を与えられた作品の一つである。小田切秀雄は以下のように評している。

社会の矛盾とその変革の必要についての鋭い先駆的な把握、しかもさしあたり変革の可能性はどこにも見出されず、かれ自身その点

ではまったく孤独無力であり、現実には指一本ふれることができないのに、醒めた心はつねに批判をしてやまない——自身のこういう心の働き方に疲れた孤独な知識人の自意識の苦しみを描くにいたっている。⁽¹⁾

ここで、「自身のこういう心の働き方に疲れた孤独な知識人」は、明らかに作中人物の高橋のことを指している。「社会の矛盾とその変革の必要についての鋭い先駆的な把握、しかもさしあたり変革の可能性はどこにも見出されず」の点においては、高橋と「我等の一団」とはほぼ同じである。ただし、「孤独無力」を感じ、さらに自己批判に至ったのは高橋のみであり、その点こそが「我等の一団」の相違点である。

また、小説の表現の問題について、小田切は「啄木としても時代の状況にたいするかれ自身の鋭い関係を、小説のなかに全面的に対象化し展開する思考や方法を見出すことができず、それをきわめてオリジナルな仕方であつた」⁽²⁾と述べている。また、猪野謙二も「我等の一団と彼」について、「一種のわかりにくさ」があることを指摘する一方、「高橋という人物に即して」と、啄木はまだこれを肯定するか否定するかという問題以前の所に立っている⁽³⁾と指摘した。両者の言説にも示されているように、「我等の一団と彼」に「わかりにくさ」が存在していることは明らかであ

るが、その原因は、作者啄木の自意識問題に対する態度がまだ混沌状態であるものの、創作の中でこの混沌状態をそのままに表現していたからなのではないだろうか。

以上述べたことは、作品の中の「彼」、つまり高橋という人物に焦点をあてて展開したものである。作品において、高橋は確かに中心人物に当たっているが、本論は高橋ではなく、「私」すなわち亀山の視点から、高橋を「他者」の位置につけて作品を分析していきたい。

鶴田欣也は『日本文学における「他者」』（平成六年、新曜社）の序文で、「自己」と他者の相対的関係にあることは、いうまでもない。自己という意識がなければ、他者に対する意識はない。ある程度の自己の成熟がなければ、他者は視野に入つてこないだろう。すると、他者が論議され始めたのは、自己の成熟を意味するのだろうか⁽⁴⁾と述べており、「他者」のあり方を重視すべきだと主張した。そして、鶴田は「他者の定義について稲賀も小谷野と同様で、他者に対する自己の根底が揺らいでくるような存在だと言っている。そしてその実態は掴みがたく、捕まれても変質してしまい他者とは呼べない、動詞的な運動だと説明している。すなわち他者として論じられるような対象はすでに他者ではなくなっているというのだ」という説明を加えていた。

「我等の一団と彼」というタイトルに明らかなように、「我等の一団」と「彼」とは対比的に二分されていたのであるが、実際のところ、「我等の一団」と「彼」の関係は、鶴田が述べていたように、常に変動していた。最初に高橋は「社中にこれといふ親友も出来たらし

く見えなかつた」人物で、偶然の会話で「我等の一団」の成員劍持の注意を惹き、やがて「我が党の士」と認められた。しかし、国家や社会に関する様々な意見を交換した後、「我等の一団」と高橋との間には明らかに距離感が生じた。そして、「人が何か言ふと、結末になつて、ひよいと口を入れて、それを転覆かえして了ふやうな、反対な批評をする傾向があつた」という結論をくだした「我等の一団」は、また高橋を他者として扱ひ始めた。ただし、「私」は高橋の観点に興味をもち、会話も社会問題から自意識問題までようやく深化していった。そこで、「私」は明らかに高橋の観点を受け入れ、この「他者」である存在をまた「自己」の一部にするのである。

本論は、このような「自己」と「他者」の関係の一連の変化を把握することによつて、近代文学における「他者」が「自己」の意識に投影する過程、さらに「自己」の再構築にどのように作用するのかを明らかにしたい。また、「我等の一団と彼」は「わかりにくい」小説にもかかわらず、作中人物の自意識、さらに作者の啄木の自意識の形成する過程の混沌状態を如実に記し、文学的価値を示していることを再評価してゆきたい。

一、「私」と「我等の一団」

そもそも「我が党」が結成されたのはどうしてなのか。そのきっかけについて、小説の中では以下のように簡潔に語られている。

「我等の一団と彼」における「他者」の考察（張 濟人）

初めから主義とか、意見とかを立てて其の下に集まつたといふでもなく、又誰もそんなものを立てようとする者もなかつたが、ただ何時からとなく五、六人の不平連がお互ひに近づいて、不思議に気が合つて、そして、一種の空気を作つて了つたのだ。⁽⁵⁾

引用文が示しているように、「我が党」のもつとも重要な共通点は「不平」ということである。その「不平」を遠慮なく話しあふことは、「我が党」の成員が最初に親しんでいく原因となつた。それについて、「私」は以下のように例を挙げて詳しく説明した。

平生から気の合はない同僚を犬だの、ばい菌だの、張子だの、ビール瓶だのと色々の綽名をつけて、糞味噌に罵倒する。一人が小皿の縁を箸で叩きつけて、『一体社では我々紳士を遇するの途を知らん。あんな品性の下劣な奴等と一緒にされちゃ甚だ困る。』と力み出すと、一人は、胡坐をかいた股の間へ手焙りを抱へ込んで、それでも足らずにぢりぢりとしにじり出しながら、『さうぢや。徒らに筆を弄んで食を偷む。のう。文明の盗賊とは彼奴等の事ぢや。社会の毒虫ぢや。我が輩不敏といへども奴等よりはまだ高潔な心を有つとる。学問をせなんだ者は真に為様がないなあ。』と酒臭い息を吹いてそれに応ずる。——そして我々は、何時誰が言ひ出したともなく、自分等の一団を学問党と呼んでゐた。⁽⁶⁾

ここで注意すべきなのは、「私」が「我が党」の一員としていながら、「我が党」のことを観察するばかりで、自分自身について何も言及していなかったことである。また、「私」はただ「我が党」の発言や行動を記し、自分なりの意見、感想などは一切表していない。

「私」は、「我が党」の会員と同じような趣旨を持っているはずであるものの、「我が党」の主張を賛成、支持することがどこでも見ええない。このような「私」の態度は、まるで「我が党」を「他者」として扱っていたのではないだろうか。

引用の部分によれば、「我が党」は、気の合わない同僚を容赦なく罵倒した一方、自分たちのことを「高潔な心を有つとる」とか、高く評価した。「我が党」は自分等の一団を「学問党」と呼んでいたが、他の同僚と区別したところは学問や知識ではなく、品性、つまり心の「高潔」さである。「私」も後に登場した高橋も、明らかに「我等の一団」から距離をとったが、品性が「我等の一団」に認められていたに違いない。そして、「私」が「我等の一団」に接近する理由は、同僚に対する不平をもっているからではなく、同じような品性を持っているからなのではないだろうか。

「我等の一団」のもう一つの側面について、「私」は次のように叙述した。

命令が出ると何処へでも早速飛び出していった。悪い顔をする者もなければ、怠ける者もなかった。他の同僚に対しても同じで、殊

更に軽蔑するするの口を利かぬのといふことはしない。(中略) 反対派と言ったところで、何も先方が此方に対抗する党派を結んでゐたといふでもない。言はば、我々の方で勝手に敵にしてゐただけの話だ。自分等が自分等の意見を行ふ地位にゐないといふ外には、社に対してだつて別に対した不平を持つてゐたのでもないのだから。⁽⁷⁾

「私」が「我等の一団」の表裏が矛盾することを指していたことによつて、さらに「私」が「我等の一団」から距離をとるようになったことは明らかである。「我等の一団」は自分らの「高潔」さを標榜する一方、実際のところは大した不満もなく、切実な理想もない。この点について、「私」は「我等の一団」の一員でありながらも、皮肉的に提示していた。ただし、にもかかわらず、「私」は「我等の一団」に参加し、親しんでもいた。その理由は、近代の自己発見と他者の関係で解釈できるのではないだろうか。

柄谷行人によれば、「明治国家が「近代国家」として確立されるのは、やつと明治二十年代に入つてからである。「近代国家」は、中心化による同質化としてはじめて成立する。むろんこれは体制の側から形成された。重要なのは、それと同じ時期に、いわば反体制の側から「主体」あるいは「内面」が形成されたことであり、それらの相互浸透がはじまったことである。⁽⁸⁾ 「我等の一団」はあきらかに「反体制」の「党派」であるが、一方、「我等の一団」の内部ではまた同質

化が存在していた。この「同質化」現象は「我等の一団」が「体制」に対抗する一方、「体制」に浸透されていたことの証左である。これに対し、「私」の存在は、「我等の一団」に属することを認める一方で、「我等の一団」に反発してもいたのである。これは、「私」が自我の内面を探している過程での表現なのではないだろうか。

二、「彼」の登場と主体視点の転換

作中に高橋が登場してから、「私」は個人として意見を表明することがしばらくなくなつた。すなわち高橋は「私」の代わりに、「我等の一団」と対立し始めたのである。

「彼」である高橋と「我等の一団」の対立関係は、逢坂という同僚をめぐる議論から始まる。「我等の一団」は、逢坂という同僚を穢いもののように取り扱っていた。しかし、高橋はかえって、「逢坂にやあれでなかなか可愛いところがある」と主張した。その理由として、高橋は逢坂が無邪気な人間だと認め、「我々が其の同じ心を逢坂のやうに十分、若しくは、十分に以上に表示することを取ってしない」と指摘した。

この高橋の意見に対し、異議を申し立てた者が二人いる。まずは剣持である。

「君は無邪気、無邪気つて言ふが、君の言ふのは畢竟教養の問題

「我等の一団と彼」における「他者」の考察（張 濟人）

なんぢや。」剣持はしたり顔になつて言つた。「さうぢやないか？ 教養と人格の問題よ。其処が学問党と非学問党の別れる処なんぢや。」⁽⁹⁾

ここで注意しておきたいのは、剣持が指摘した対立関係は自分自身と逢坂ではなく、「学問党」と「非学問党」との関係だということである。彼の発言は、学問党については無批判に肯定しながら、一方、非学問党については頭から批判的である。これに対し、高橋は、学問党の一員でありながら、学問党のことも容赦なく以下のように批判した。

「すると、何か？ 人格といふ言葉は余り抽象的な言葉だから、暫く預かるとして、教養といふことはだね。つまるところ、教養があるといふことと、自己を欺く——少くとも、自己を韜晦するといふことと同じか？」⁽¹⁰⁾

高橋はまず、「我々自身を省るが可い」と主張していた。ここで批判した対象は自分も含めた「学問党」全員に違いない。両者の観点は対照的であるが、出発点は同じく、「学問党」という団体である。逢坂のために弁解するのではなく、高橋は批判の対象を変え、議論の中心とする「教養」は、明治時代の近代教育制度の形成とともに用いられ始めた言葉である。当時、「教養の人」としての代表人物の一人

は、東京帝国大学講師のラファエル・ケーベルである。彼は哲学概論、美学、古典語を教え、受講者に教養に関する影響を与えていた。ケーベルに対する評価によって、「教養の人」がどのような人間像であるかを把握できるようになる。なお、「教養と人格」が「学問党と非学問党の別れる処」であるという剣持の主張と、それに反対する高橋の主張をそれぞれ見直しておきたい。

次に意見を申し立てた安井は、「逢坂の奴の性質が無邪気であるにしろ、ないにしろ、兎に角奴の一举一動に表れるところが、我々の気に食わん。頭先から足の先まで気に食わん。気に食わんから気に食わんといふに、何の不思議もないぢやないか？」¹¹ と言い、善悪ではなく、好悪の角度から逢坂を攻撃する合理性を主張した。

それに対し、高橋はまず、「我々」が感情を発露させることを重要視するものの、逢坂のように正直に発表することができない点を指摘した。さらに、高橋は、もし「我々」が逢坂を否定すれば、感情を正直に発表する主張を否定することと同じであるという結論を出した。

高橋の論調に説得力があるかどうかを別にして、彼の視点が「我等の一団」のほかの成員と根本的に違っている点は重要である。剣持や安井は総じていえば、他者としての逢坂を攻撃した時に、「我々」自身を省みることはない。つまり、「我々」自身を相対化していない。また、他者の角度から問題を見る意識ももっていない。その結果、彼らは敵にした対象を攻撃するばかりで、自分自身が主張したもの（例えば、教養または感情を正直に発表すること）を貫いていなかった。

それに対し、高橋も常に「我々」を用いてはいるが、「我々」を主体にしなから、常に「我々」を相対化してもいるのである。この点において、両者は大いに性格を異にしている。

三、「我等の一団と彼」から「私と彼」へ

物語の後半は、ついに「私」と彼（高橋）との間の齟齬を描き始めた。まず、高橋が「私」の住所を訪ねてきたのをきっかけとして、「私」が高橋の人生観をいっそう了解し、感心した場面である。

高橋は平生の利己的な立場について、以下のように述べている。

「何うと言つて、僕だつてさう確かな見込がついてるんぢやないさ。技師が橋の架け替えの設計を立てるやうにはね。——然し考へて見たまへ。利己といふ立場は実に苦しい立場だよ。これと意識する以上はこんな苦しい立場は無いね。さうだらう？つまり自分以外の一切を敵とする立場だものね。だから、周囲の人間のする事、言ふ事は、みんな自分に影響する。善にしろ、悪にしろ必ず直接に影響するよ。先方が其の積りでなくつても此方の立場がそれだからね。そしてしよつちゆう気の安まる時が無いんだ。まあ見給へ。利己的感情の盛んな者に限つて、周囲の景気が自分に都合が可くなると直ぐ思ひ上がる。それと反対に、少しでも自分を侵すやうな、気

に食はんことが有ると、急に気が滅入つて下らない憂さ晴らしでもやつてみたくなるんだね。そんな時は随分向う見ずな事もするんだよ。——それや世の中にはさういふ人間は沢山有るがね。有るには有るけれども、大抵の人はそれと意識してゐないんだね。其時、其時の勝手な弁解で自分を欺いてるんだね。」¹²⁾

ここで、高橋は明らかに利己者の苦しみを感ぜられる自分と、それと意識していない「大抵の人」と比較対照しながら、同時に自分の孤独さを表明している。

彼の孤独について、小田切秀雄が「孤独な知識人の自意識の苦しみ」と評していたことについては、すでに触れた通りである。

前述したように、彼の孤独感の形成は、高橋の自分以外の人、つまり「他者」に対する把握に基づいている。しかし、この「他者」とは何者だろうか。高橋は孤独な自意識を形成する前提として、彼はまず自分に相対している「他者」のイメージを作り上げた。ところが、彼が意識している「他者」の範囲は実際のところ、非常に限定されていたのではないだろうか。つまるところ、高橋の「他者」像は、主に「我等の一団」から出来上がったのではないか。高橋のような人間が、どうして「我等の一団」に参加するののかについて、「私」は、「探検家が未知の世界を探索する興味ではないか」と推測した。ほかの成員が共通認識を求めするために、同じような性質をもっている人に接近することと違って、高橋が「我等の一団」に参加する動機は「他者」と自

分の相違点を探すためである。この「他者」像を先に立てることで、高橋はついに自意識を発見した。

「私」の回想では、以下のような高橋との対談がある。

(高) 「僕等はまだ、まだ修行が足らんね。僕は時々さう思ふ。」

(私) 「修行?」

(高) 「僕は今までそれを、つまり僕等の理解はまだ、まだ足らん所為だと思つてゐた。常に鋭い理解さへ持つてゐれば、現在の此の時代のチレンマから脱れることが出来ると思つてゐた。然しさうぢやないね。それも大いに有るけれども、そればかりぢやないね。我々には利己的感情が余りに多量に有る。」

(私) 「然しそれは何うすることも出来ないぢやないか? 我々の罪ぢやない、時代の病気だもの。」

(高) 「時代の病気を共有してゐるといふことは、あらゆる意味に於いて我々の誇りとすべき事ぢやないね。僕が今の文学者の「近代人」がるのを嫌ひなのも其処だ。」

(私) 「勿論さ。——僕の言つたのはさういふ意味ぢやない。何うかしたくつても何うもすることが出来ないといふだけだ。」

(高) 「出来ない君は思ふかね?」

(私) 「出来ないぢやないか。我々が此の我々の時代から超越しない限りは。——時代を超越するといふのは、樗牛が墓の中へ持つて行つた夢だよ。」

(高)「さうだ。あれは悲しい夢だね。——然し僕は君のやうに全く絶望してはゐないね。」¹³⁾

この対談が示すように、「私」と高橋との間の主な分岐は、時代から超逸できるかどうかに対する意見にある。「私」は「我々」が「我々の時代」から超逸できないので、時代の病気を共有しているのは我々の罪ではないと主張している。それに対し、高橋は「我々」が時代から超逸できるので、超逸できないのは「僕等」の修行が足りないからだと主張している。この分岐を一層解釈してみれば、「私」と高橋は自己否定について反対の見方を持っているのである。「私」は「我々」が共有しているもの、つまり「時代の病気」が存在している上で、自分自身が無力で、且つ無責任だと主張している。それによって、「私」は「我等」に融合し、自分自身に対する批判を互いに共有することによって、合理化させていった。それに対し、高橋は反対の主張をもっている。彼は共有している「時代の病気」を認めているが、自分自身が時代の潮流に従うことに悔しさを感じた。彼は時代を超逸できないのが修行の不足からだと意識し、自己否定しつづつあった。

つまり、「私」は「我々」の中で、共通の素質を見つけることで、自意識を安定化させた。しかし、高橋ははまだ共通のものを超越しようとする理想を持ち、自己否定をしながら新たな自意識を探していたのである。

前述のように、高橋は「時代の病気」の存在を認めている一方、

「修行」によって自らの「超逸」を達成しようとしている。彼は「今の文学者」の中の一員でありながら「今の文学者の「近代人」が」のが嫌いだという。これこそが彼の孤独感の形成の由来ではないだろうか。しかし、彼は明らかに失敗してしまった。後に、彼が仕事を休んで活動写真を見に行ったことがばれたことは、ある意味で時代を超越する「修行」に反する行動をしたことを証明している。つまり、高橋の孤独は精神上に留まり、実践の面に影響を与えていなかったのである。

もう一つの注意点として、高橋は修行が足りないことを語る際に、「僕等の修行まだ、まだ修行が足らん」と言った。しかし、「時代の病気」を語る際に「我々の誇りとすべき事ぢやない」と言った。「僕等」という代名詞はこの文脈の下で明らかに「私」と高橋自身の二人を指している。それに対し、「我々」は、その時代の人、少なくともその時代の文学者を指すのに違いない。高橋が「僕はまだ、まだ修行がたらん」でもなく、「我々はまだ、まだ修行が足らん」でもなく、「僕等」を用いた理由について、二つの可能性がある。一つ目は、高橋が「私」が彼自身と同じような意識を持っている人と想定し、あるいは「私」と彼との間に様々な共通点を見つけ、同じように「常に鋭い理解」を持っている人と想定したからである。二つ目は、高橋が「私」に接近することによって、自分自身の孤独さがある程度で抑えていたので、「私」と一緒に「修行」しようとしたからである。兎に角、高橋にとって、「僕等」(「私」と彼自身)は「我々」と違う枠に属して

いる。高橋は、「我々」の中で自己否定しつつあり、孤独と感じているが、「私」と彼の関係の中でどのように自意識を探しているのか。ただし、「私」の視角から見れば、「私」と高橋は決して同種類の人ではない。

高橋は実践の意識がなく、「結論だけは有る」人間で、社会的な現実に対して常に傍観的な態度をとっている。「時代に絶望しない」というものの、「斯くせねばならんと言ふのではなく、斯く成らねばならん」と主張している。それに対し、「私」は、「言つたことは直ぐ実行したがる」人だと高橋に指摘された。つまり、高橋が空想派に近く、「私」が実践派に近いことは明らかである。

対談の中で、「私」は以下のような意見を述べている。

「君の言ふことは実に面白いよ。——然し僕には、何うも矢つ張りただ面白いといふだけだね。第一、今の日本が君の話のやうに、さう進歩してるか知ら——若しそれが進歩といふならだね。それに何だ、それあ道德にしろ、何にしろ、すべての事が時代と共に変わては行くけれども、その変わり方が、君の言ふやうな明瞭な変わり方だとは僕は思はんね。我々が変つたと気の付く時は、もう君代りのものが出来てる時ぢやないか？そして其の新旧二つを比較して、我々が変つたと気が付くのぢやないのか？」¹⁴⁾

ここで、「私」が繰り返して強調したのは、「気が付く」ことであ

「我等の一団と彼」における「他者」の考察（張 濟人）

る。つまり、「私」は理論上に存在している変化より、実際に感じられる変化の方を重要視する。つまり、私は自分自身が確実に経験したことを信じており、高橋の思想に興味を持ってはいるが、自分の経験と違っていることが納得できない。

「私」は「大きい夢」をもっている、「極めて利己的な怠け者」と自称した高橋の生き方を決して賛成するわけではない。しかし、「時代の犠牲」としての人生に極力反抗する高橋の精神は「私」を感動させ、さらに自分の父に関する記憶を喚起させた。

「僕はただ僕の祖先の血を引いて、僕の両親によつて生れて、そして、次の時代の犠牲として暫らくの間生きてゐるだけの話だ。僕の一生は犠牲だ。僕はそれが厭だ。僕は僕の運命に極力反抗して。僕は誰よりも平凡に暮らして、誰よりも平凡に死んでやらうと思つてる。」

聞きながら私は、不思議にも、死んだ私の父を思い浮かべてゐた。父は明治十—二十年代に於いて、私の郷里での所謂先覚者の一人であつた。自由党に属して、幾年となく政治運動に憂身を費した挙句、やうやう代議士に当選したは可かつたが、最初の議会の会期半ばに盲腸炎に罹つて、閉院式の行はれた日にはもう墓の中にあつた。それは私のまだ幼い頃の事である。父が死ぬと、五、六万は有つたらしい財産が何時の間にか無くなつてゐて、私の手に残つたのは、一部との外には何も無かつた。——

次の時代の犠牲！私は父の一生を、一人の人間の一生として眺めたやうな気がした。父の理想——結局は父を殺した。そして其の結論は、子たる私の幸福とは何の関係も無かつた。——⁽⁴⁵⁾

高橋の言説によれば、彼は「時代の犠牲」を拒否するために、平凡の人生を送ろうとした。つまり、彼が「極めて利己的な怠け者」になることは、犠牲としての人生に対する消極的な抵抗である。この「犠牲」はまず、祖先や両親から相継いだものとされ、他人の期待によつて形成されるものと想定できる。また、それに対する抵抗は「誰よりも平凡に暮らして、誰よりも平凡に死」ぬということである。つまり、「犠牲」は平凡の反対で、「理想」につながっていることである。以上の二つの性質をまとめてみると、高橋が語った「犠牲」は、他人に期待されている理想的なもののために送る人生である。

それに対し、「私」は明らかに高橋の思想の影響を受けていた。「私」は亡父のことを思い出し、父の一生が高橋の言ったように無駄な犠牲に過ぎないと意識した。この対話は、「私」に深い影響を与えた。小説の結末まで、「私」は再び「大きい夢」に関することを言及することがなく、代わりに身の回りの人間の現状に関心を示している。その際に、「私」は高橋の残酷さを発見し、反感を生じた。

眼はひたと相手の顔に注ぎながら、心では、健康な高橋と死にかかつてゐる肺病患者の話してゐる様を思つてゐた。額に脂汗を滲ま

せて、咳入る度に頬を赤くしながら、激した調子で話してゐる病人の衰へた顔が、まざまざしく見える様だつた。そして、それをじろじろ眺めながらふんふんと言つて寝転んでゐる高橋が何がなしに残酷な男のやうに思はれた。⁽⁴⁶⁾

小説前半の「私」は「我等の一団」が逢坂を攻撃した時に無関心な態度をとつていたが、後半の「私」は病人の松永に同情し、高橋の異常な親切を残酷な行為とし、高橋に反感を持ち始めた。このような変化は、「私」が高橋の影響を受け、「我等の一団」の集団的な意識から脱出し、個人の感受性を重視し始めた結果なのではないだろうか。つまり、「我等の一団」の集団意識をもつていた「私」は高橋を他者視しながら、自らの意識も同時に再構築し、「時代の知識人」ではなく、独特な「私」の立場を形成させたのである。

まとめ

本論では、「我等の一団と彼」における「我等の一団」、「私」、「彼」との間に変化しつつある自他関係を捉え、他者像を作り上げることによつて、自意識を発見し、また自意識を再構築することを明らかにした。

小説のタイトル「我等の一団と彼」においては、「私」という存在が「我等の一団」の中に含まれている。また同時に、「私」は、高橋

が登場する前には、「我等の一団」と対し、傍観的な態度をとった。高橋が登場した後、暫く「私」は「我等の一団」と同じ立場になった。高橋に親しくなった後、「私」の立場はまた変わり、独立した個体となった。

この一連の変化は、作者啄木による自意識の表現が揺れていることを示している。高橋は「我等の一団」の成員であるが、その立ち位置は周縁的で、他の成員が同質性を求めるのと違って、「我等の一団」を相対化し、自意識の独自性を探求している。「私」は高橋を他者視する際に、自分の立場を「我等の一団」の中に位置づけた。しかし、結局「私」は高橋の影響を受け、独立な意識を形成させた。「私」も高橋も、「我等の一団」を肯定でもなく否定でもなく、不即不離の態度をとっている。また、「私」と高橋の関係も同じく、対立と統一の間に揺れている。

「我等の一団と彼」では、啄木が登場人物を自律した主体ではなく、関係性の中で対象化しようとする意識が見られる。その結果として、作中人物の視点も立場も不穏状態となり、読者に捉えにくくなった。

しかし、もし各人物を特定の関係の中で位置づけ、「他者」の影響を明らかにすれば、その人物の不穏な自意識を絶えざる変化の中で把握できるのではないだろうか。実際に、「私」は最初、「我等の一団」の一員として、共有している立場から、高橋を他者視した。次に、高橋との対話によって、「私」は彼が「時代の病氣」に一人で抵抗する孤独感を理解した。そして、「私」は、「我等の一団」のような時代の

知識人との距離感を意識し、自分なりの理想を持つことが可能だと知った。さらに、高橋は時代の犠牲になることを拒否することで、自分が「極めて利己的な怠け者」として生涯を送る理由を解釈した。「私」は本来、「言つたことは直ぐ実行したがる」が、高橋の思想の影響を受け、父の積極的な活動が結局無駄な犠牲になったことに気づいた。結末においては、自分自身も大きい夢を諦め、平凡な生活に没頭した。

「私」にとって、「他者」は最初に、表題で「彼」と呼ばれる高橋を指しているが、最後「我等の一団」になった。この変化は、「私」が時代の知識人に共有されている自意識を拒否し、独自の自意識を遂に見つけるに至った過程を反映している。

実際において、明治文壇では、独自の自意識を持つ文学作品が高く評価されていた。ただし、評価基準自身の成立は、共有している価値観に基づいている。このような評価基準で、「独自の自意識を持つ」と評判された作品は、その時代に共通している認識を反映している。逆に、文壇に評価されなかった作品が、その時代に認められない個性を持つ可能性があるのではないだろうか。本研究は、石川啄木の小説を例にして、当時において失敗作と見られた作品によって反映された評価基準の限界を明らかにするものでもある。

注

- (1) 「解説」『石川啄木全集 第三卷』四五〇頁、昭和五三年、筑摩書房
- (2) 注1と同じ
- (3) 「啄木の小説」『明治の作家』七六頁、昭和五一年、岩波書店
- (4) 『日本文学における「他者」』（鶴田欣也編）一五七頁、平成六年、新曜社
- (5) 『石川啄木全集 第三卷』三七〇頁、昭和五三年、筑摩書房
- (6) 注5と同じ（三七〇頁）
- (7) 注5と同じ（三七二頁）
- (8) 「告白という制度」柄谷行人『日本近代文学の起源』一一二頁、昭和五五年、講談社
- (9) 注5と同じ（三八〇頁）
- (10) 注5と同じ（三八〇頁）
- (11) 注5と同じ（三八〇頁）
- (12) 注5と同じ（三八四頁）
- (13) 注5と同じ（三八三頁）
- (14) 注5と同じ（三八八頁）
- (15) 注5と同じ（三九三頁）
- (16) 注5と同じ（三九八頁）

参考文献

- 『石川啄木全集 第三卷』昭和五三年 筑摩書房
- 『小説のしくみ』菅原克也 平成二九年 東京大学出版会
- 『啄木小説の世界』上田博 昭和五五年 双文社
- 『日本近代文学の起源』柄谷行人 昭和五五年 講談社
- 『日本文学における「他者」』鶴田欣也 平成六年 新曜社
- 『明治の作家』猪野謙二 昭和五一年、岩波書店